

一方その頃、ノランはノアを連れ、市場へ雑貨や漂着物・魚を売りに来ていた。

夕方にロインと待ち合わせをして、その足で学生寮に入るため、食事はそのままロインの部屋で済ませる予定だ。

ひとしきり売り出しが終わったら食料の買い出しをしながら市場や通りの店を見て回るようになった。

ノランは手頃な場所を確保すると、背中の敷物を広げて手早く商品を並べていった。

「これ全部、みんなで用意したの？」

並んだ商品を見てノアは目を輝かせた。

「そうだぜ！ 雑貨はリアムが作ってるのをネックが手伝ってたけどな」

「そうなんだ」

パンッとノランが手を叩く、

「よし！ じゃあ始めるか！ さあアリーベ名物、魚と雑貨はいかがすすか！」

ひと声、大きな声を出すと人だかりができ、敷物の上にあったものが飛ぶように売れていった。

全ての商品が売れるのに二十分もかからなかった。

ノランの見事な商売具合にノアが拍手して、

「全部、売れちゃったね」

「すげえだろ？ アリーベ名物って言うところじゃそこそこ有名だからな！ でも今日は売れ行きがすげえわ。こりゃあネックとリアムも喜ぶな！」

嬉しそうに敷物を畳んで撤収し始めるノランを見ながら、

「ノランはずっと、ネックとリアムと一緒にアリーベに住んでるんだよね？」

「ん？ そうだな、あいつらといるのも四、五年くらいになるか」

「ずっと一緒に住んでるわけじゃないの？」

ネックやリアムとのやり取りから、本当の家族のように見えていたノアには意外だった。

ノランは敷物を畳んで麻袋にしまった。

「そうだぜ、俺はネイクス大陸の出身でさ、あいつらとはこの大陸に来てから出会ったんだ」

「ネイクス大陸？」

「そう、ネイクスはこのフィルスト大陸よりもでかい大陸だぜ」

「そうなんだ……！」

見るもの全てが新鮮なノアにとって、フィルスト大陸の大きさをさえ推し量ることはできない。

「ネイクス大陸も当時は戦争があってさ。俺が住んでた地域はわりかし平和だったんだけど、突然襲撃を受けたんだよ。まさか自分たちの住む場所を追われるなんて思ってもなかったぜ。んで、戦火を逃れるためにこの大陸に渡ってきたわけ」

ノアが無言で相槌を打った。

「しばらくは一人で旅をしてたんだけど、地図もないからただただ彷徨って、生活なんかままたまらないし、一日一日を生きるのに必死でさ。ある街でもう餓死寸前、喉からっからになってぶっ倒れちゃったんだよ」

ノアが小さく「えっ」と驚くが、ノランは続けた。

「でもそんな時だったな、あいつらに出会ったのは」

ノランは少しだけ目線を落としたが、顔を上げてノアににっこり笑って見せる。

「ネックもリアムも旅しててさ、今よりこーんな小さかったんだぜ、そんな奴らがぶっ倒れてる俺に水を分けてくれたんだぜ」

「そうだったんだ……」

知らない世界、知らない三人の話にノアはただただ驚くばかりだった。

「一人ってのは心細いし、助けてもらったら嬉しくなる。だからノア、俺はお前の味方だぜ」

ノアはノランから向けられた厚意が嬉しくも、どこか複雑な気持ちだった。

だがノランの屈託のない笑顔には応えたくて、

「うん」

ノランはお金の入った小さな布袋を片手でお手玉しながら、

「辛気臭い話しちまったな。まとまった金もできたし、ネックとリアムの待ち合わせまで時間あっから夕飯の買い物ついでにそこらへんの店でも見るか！」

得意げに市場をめぐり始めた。

ノアはノランの大きな歩幅についていくのにやっとだった。

「欲しいもんとか食いたいもんあったら遠慮せずに言えよな！」

「……うん」

「どうした？ 具合でも悪りいか？」

ノアは元気なく首を振り、ぽつりと、

「私、皆にもらってばかりだなんて」

間を置いてノランが笑い飛ばす。

「そんなのちっとも気にする必要ねえって！」

「でも……」

「俺もネックもリアムもそうしたくてしてるんだし、こういうのは持ちつ持たれつってやつよ」

ノアの横でノランが「おっ」と視線を露店に向けた。

ノランはそのまま露店に小走りで行くが、ノアは立ち止まって人の流れの中で俯いた。

「いいのかな……」

アリーベでも、この街でも、三人やロインに親切にしてもらっている。

その親切心が大きくなればなるほど、どこか心が痛んでいく。

肩を落とすノアの元へノランが戻ってきた。

「見ろよ！」

ノアの目の前に琥珀色のキャンディが映った。

陽を受けて輝くキャンディは宝石のようにキラキラと輝いている。

「……」

「さっき通った時に気になってたんだよな。これはノアの分な！」

ノランが両手に持っていたうち、片方のキャンディをノアに差し出した。

ノランの勢いに押されてノアはキャンディの棒を握っていた。

「んまい！」

ノランがキャンディを嘗めてにっこり笑った。

光り輝くキャンディとノランの笑顔が不思議と同じように見え、ノアも一嘗した。

「……!!」

みるみる口の中が甘い香りに包まれていき、ノアは思わず頬に手を当てていた。

ノランが「うまいだろ？」と訊くと、ノアは「うん」と頷いていた。

ノランは満足そうにキャンディを口に頬張ると、

「よっしゃ、じゃあ他の店も行こうぜ！ 案内はこのノラン様に任せろ」

人の隙間を縫って歩き出した。

二人は食料の買い出しを終えると、雑貨や玩具を見て回り、露店のゲームに興じた。

お祭りに夢中になっていると、あっという間に待ち合わせの時間になった。

「おっ、そろそろ時間か、待ち合わせ場所へ行こうぜ」

三叉路に向かうと、既にネックとリアムが並んで待っていた。

二人がノランとノアに気づいて手を振った。

四人が合流すると、

「ノランと二人はどうだった？」

「市場は楽しめたか？」

ネックとリアムが微笑んでノアを訪ねる。

ノアは心がざわついたが、

「楽しかった」

と、無理して笑って見せた。